

日垣隆 どうへ行くのか



最近話題の『できる若者は3年で辞める』（出版文化社）は、タイトルだけを見ると教育的でないように思われる。たいていのバカ者、失礼、若者は自分をすでに何者かだと思ってお

たあとどうなるのか。とまあ、タイトルだけ見て文句をつけるのは大概にしておこう。中身は、すこぶるまっとうな本だからである。

◆がき・たかし 1958年生まれ。コピーライターなどを経て、作家活動に。「個人的な愛国心」（角川）、「一方向音痴の研究」（W.A.C.）など著書多数。

あがいている。残念ながら日本では、「格差をなくせ」と実に恐ろしい独裁型共産主義国家でもカクヤと思える論調が未だ支配的だ。

著者の久野康成氏は、〈子

「お勉強」をすれば本当に儲かるのか

ない。本
当に勝間
氏はそう

り、独自に稼げる処方も見つ

いていないのに「できる」と思い込めるところがスゴい。が、「3年で辞める」若者がみな「できる」人材であるわけがなく、仮に「できる若者」が3年で辞めるのが本当だとしても、それを繰り返して

いつでもインドや中国の安い労働力に代替される質の仕事しかできないワーカーは、日本でも確実に淘汰されていく。のみならず、逆転すら起きるだろう。インドの教育は均質を主眼としておらず、各所でリーダーを要請しようと

どもの頃に植えつけられた「学ぶよいこと」という価値観は、良きリーダーシップの阻害要因だと見抜く。現場では、従来のお勉強ではなく、実践と智慧と問題解決が求められているのである。他方、この同じ時期に同じ

ような販売曲線を描いてベストセラー化しつつある勝間和代「無理なく続けられる年収10倍アップ勉強法」（デイスカヴァー）は、従来の受験本からカット&ペーストして成ったかと思われ、お勉強を大人になってからも続けければ幸せが訪れるという、まことに幸せな本である。

私の要約が意地悪なのではない。本
当に勝間
氏はそう

そういう人たちは、いつまでも資格試験やら役所への就職を目指す。幸多かれと祈るのみだ。
よく考えていただきたい。幼いころから、親の趣味でお受験に翻弄され、お勉強よいことと妄信する道は、せいぜい有資格者を育てることしかできない。
それで済んだ時代もあったのは事実である。しかし、実践的問題解決を図る方法は、学校でのお勉強の延長線上にあるとはいえず（締め切りがあるという点において）、範囲も答えも一律でない点で圧倒的に異なる。
資格をとれば幸せになるという説教本は、ゴミ箱がふさわしい。
（毎週木曜掲載）